

S-4

救急外来初期診療を中心とする名古屋第二赤十字病院救急部の取り組み

名古屋第二赤十字病院 救急部

○^{いなだ}稲田 ^{しんじ}真治、野口 善令、塚川 敏行、花木 奈央、福田 徹

名古屋第二赤十字病院は、人口220万人を抱える名古屋市内5ヶ所の救命救急センターの1病院として、平成20年には救急患者43224人、救急車6920台を受け入れた。救急部の常勤スタッフは4名（うち後期研修医1名）であり、従来は平日日勤帯の救急外来診療を中心に体制整備と教育に力を入れてきた。外傷診療を例にとると、off the job training コースの定期開催と臨床診療での on the job training をくり返し、重症例を中心に年間100例程度の外傷スコア（AIS、RTS）をデータ化した上で、防ぎえた死の可能性のある症例を症例検討会で取り上げ、重症症例に対する対応のポイントを確認してきた。こうした取り組みにより、従来殆ど実現しなかった救急室開胸も可能となった。一方、夜間・休日は院内各科持ち回りの当直により院内スタッフ全員でカバーする「全科参加型の救急医療」を実践してきたが、医療の専門分化が進む中、安全で質の高い救急医療を実践するためにも救急専従医が従来以上に救急外来診療をカバーする必要性が増している一方、マンパワーの問題が未解決であった。本年度からは、院内後期研修医が救急部を2ヶ月間ローテーションすることを必須として主に深夜帯をカバー、毎朝のカンファレンスで問題症例をピックアップし、まだまだ不十分ではあるものの救急専従医がより多くの時間帯の救急外来診療に関われる体制作りを開始している。

救急医のカバーすべき領域は、救急外来診療にとどまらず、救命救急医療、従来科に当てはまらない疾患の入院管理など多く存在するが、まず、全ての時間帯で安全かつ質の高い救急外来診療を実現することを目標として取り組んでいるわれわれの現状を報告する。